

結 語

文化交渉学の手法により、本書では以下の幾つかのことが明らかになったと考える。

中国で宋代から元代にかけて盛んな信仰があった招宝七郎大権修利は、浙江一帯で信仰され、また寺院の伽藍神ともなり、『水滸伝』に名が記されるほどの知名度を誇ったが、その後は信仰が衰えた。そして日本の五山諸寺にて祀られ、伽藍神として残ることになった。ただ、実は寧波の阿育王寺にも招宝七郎の像は残っている。祠山張大帝も、宋から明にかけて江蘇から浙江において盛んに祭祀されたが、その後信仰が衰えていった。それが日本において、招宝七郎同様に伽藍神として祀られるようになった。その他、感応使者や掌簿判官も同様に現在の日本の寺院に残っている。ただ、幾つかは由来が不明な神があり、そのうちの一つは太白龍王である可能性が高い。

華光大帝は、明代までは中国南方で信仰が隆盛であったが、その後清代には衰えた。この神は福建では伽藍神として機能していた。それが江戸初期の黄檗宗と共に伝来し、宇治の萬福寺をはじめ、各地の寺院に祀られることになった。ただ、それが華光大帝だと認識されていない場合も多い。

四霊の一つ玄武は、宋代以後の道教においては真武・玄天上帝として発展したが、その過程はかなり複雑である。日本においては、真武は妙見菩薩として祭祀されたが、これは鎮宅靈符など、幾つかの神格が結合して成ったものである。

地藏菩薩は、日本と中国においては異なった性格と形象を持っているが、それはあまり意識されていない。同じ仏教という名称であっても、日中間においてかなりの差異が存在することを意識すべきである。

台湾とシンガポールは華人の移民が多く、その出身地の神々の祭祀が移されてきている。ただ、それらの神々の多くは、福建や広東の一地方の神であり、本来はそれほど広い信仰圏を持たないものである。保生大帝・開漳聖王・広沢尊王・三山国王などはいずれも限られた地域の地方神であるが、移民の

広がりに伴って、信仰圏が拡大することになった。

長崎や沖縄にも華人系の神々が来ている。ただ、同じ中国南方から伝来した神であっても、長崎と那覇ではかなり受け入れる神が異なっている。長崎には福建系の神々の足跡が見られ、また那覇では普化天尊などの雨乞いに関する神の信仰が強くなっている。この点についてはこれまであまり意識されていなかった。

後 記

最後に、本書の出版に至った経緯について述べたい。

本書は、2007年度に始まった文部科学省グローバル COE プログラムに採用された関西大学「東アジア文化交渉学の教育研究拠点」の研究活動をふまえて書かれたものである。また同時に本書は2011年に関西大学東アジア文化研究科に提出した学位論文『アジアの民間信仰と文化交渉学』を改稿したものである。

この書の前に、これまで『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部）と『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部）を出版したが、これらの二著と本書では、研究の対象や手法において大きな違いがある。

これまで筆者は主に中国の道教や民間信仰において祭祀される神々について、その由来や変容を中心に研究してきた。取りあげた神々は、哪吒太子や真武大帝や八仙などである。これらの神々の大半は、ほぼ中華圏でのみ信仰されるもので、その意味では「アジア研究」ではなく、「中国研究」の範囲に収まるものであった。

しかし2005年度から始まった文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成（にんぷろ・代表小島毅氏）」の活動に参加し、その後グローバル COE プログラムに採用された関西大学「東アジア文化交渉学の教育研究拠点（代表・陶徳民氏）」のメンバーとなることによって、あらたに「アジア文化」「文化交渉学」という形で視点を広げていった。そしてこれまであまり研究面で重視されていなかった神々について、改めて調査と研究を行うことになった。

例えば、本書で取りあげた華光大帝がある。華光大帝は黄檗宗の伝来とともに日本中の禅宗寺院に受け入れられ、各地でたくさんの像が造られるようになった。京都宇治の萬福寺には、中国人仏師の范道生が作ったみごとな華光像が残されている。しかしそもそも萬福寺に華光像があること自体、まっ

たく認識していなかった。なぜならそれまでの研究では、同寺にあるのは「関帝」の像とされていたからである。ところが黄檗宗の田中智誠氏に、萬福寺の像は筆者の『中国の神さま』（平凡社新書）に記載されている華光ではないかとお教示いただいた。そこで行って調べてみたところ、三ツ目で髯のない像であり、まちがいに華光であった。そもそも三眼で無髯であるだけで、すでに関帝ではないとわかる。これについては自分でよく調べもせずに、他者から示唆を受けてやっと判明したわけである。その後はその反省から、なるべく自分の目で調査することを旨とするようになった。先行研究も、実は疑ってかかるべきものが多いのである。結局のところ、自分の目で見てないものはあまり当てにならない。

また別の例では、鎌倉時代に伝来した招宝七郎や祠山張大帝などがある。これも他人から教えてもらったようなものである。これらの神々の存在自体は、中国の通俗小説を通じて、それなりに意識はしていた。しかしこれらの神が、日本の曹洞宗や臨済宗の寺院に伽藍神として当たり前のように祀られていることは、大倉集古館の田中知佐子氏にご教示いただくまで全然知らなかった。

華光はともかく、招宝七郎神は中国ではほとんど信仰が残っていない。それで結局は、中国の神の調査をするにもかかわらず鎌倉の建長寺など、日本の禅宗寺院を中心に調査することになったのである。こういった渡来神の調査はかなり難航しがちである。渡来神の多くは、寺院や神社に神像や図像として残されている一方で、関連する文書類は異様とも思えるほど少ない。そのために、宗教史の観点からのみならず、美術史や文学史の立場からの観察が必要になる。ただ、こういった分野すべてに通暁することは当然不可能であるため、今回の自分のように、他の研究者の方々からのご教示を仰ぐということが必要になったわけである。

それでも、こういった神々を調査することにより、いままでの道教や民間信仰の研究ではわからなかった神信仰の発展と衰亡の過程が判明した。中国で失われた信仰を掘り起こすという面からも、これらの華人系の渡来神は重要であるといわねばならない。

また真武帝の影響を受けた妙見神や、地藏菩薩についても、日本と中国ではその信仰のあり方が全く異なるということも考察してみた。これも文化交流における一現象と考える。

さらに、長崎や琉球における媽祖や普化天尊の祭祀について調べ、またシンガポールなどの地においても様々な祭祀を見ることによって、「文化交流学的なアジア宗教研究」の手法を手探りで構築していった。本書は、これらの研究の成果をまとめたものである。もっとも、まだまだ改善すべき点は多いと考える。

例えば、一つの研究領域に縛られないという考え方は、すでに早稲田大学大学院在学中に、福井文雅先生のゼミにおいて意識していたことであったと考える。しかし実際にその考え方を研究面に応用するには自分自身の不勉強もあり、ずいぶん時間がかかってしまった。慚愧の至りである。

なお本論の各論における元来の掲載誌や書籍に関して以下に記載する。

第一部「日本の寺院における渡来神と文化交流」の第一章「日中の五山における伽藍神と文化交流」は、次の幾つかの論文を元に再構成したものである。

- ・「海神・渡来神としての招宝七郎大権修利」『白山中国学』通巻第13号（東洋大学中国学会）2007年
- ・「祠山張大帝考—伽藍神としての張大帝—」『関西大学中国文学会紀要』第28号 2007年
- ・「『西遊記雑劇』における華光と大権」『東アジア文化交流研究』（関西大学文化交流学教育研究拠点 ICIS）第3号 2010年
- ・「鎌倉五山の伽藍神像について—太白龍王を中心として—」（松浦章編『東アジアにおける文化情報の発信と受容』関西大学アジア文化交流研究叢刊第4輯 雄松堂出版）2010年

第二章「黄檗の伽藍神と文化交流」の元となった論文は次の通りである。

- ・「靈官馬元帥華光考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』第18集 1991年

- ・「萬福寺伽藍堂の華光菩薩像について」『黄檗文華』第122号（黄檗山萬福寺文華殿黄檗文化研究所）2003年
- ・「華光大帝信仰の変容—杭州と福州・馬祖を例に—」『アジア文化交流研究』（関西大学アジア文化交流研究センターCSAC）第4号 2009年
- ・「『西遊記雜劇』における華光と大権」『東アジア文化交渉研究』（関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS）第3号 2010年
- ・「華光大帝の変容」『東アジア文化交渉研究』（関西大学東アジア文化研究科）東アジア研究科開設記念号 2012年

第三章「妙見神と真武神における文化交渉」の元となった論文は次の通りである。

- ・「妙見信仰と真武信仰における文化交渉」『東アジア文化交渉研究』（関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS）第5号 2012年

第四章「日中の地藏菩薩の差異と文化交渉」は次の諸論文を再構成したものである。

- ・「地藏菩薩新羅王子説について」『東北大学東北アジア研究センター叢書』第3号 2001年
- ・「安徽九華山における地藏信仰」『アジア文化交流研究』（関西大学アジア文化交流研究センターCSAC）第1号 2006年

第二部「アジアにおける神々の往来と文化交渉」の第一章「台湾・シンガポールの閩粵系諸廟と文化交渉」は、次の論文を元にしてしている。

- ・「台湾新莊市の寺廟について」『コミュニケーション学科論集（茨城大学人文学部紀要）』第5号 1999年
- ・「台北保安宮と保生大帝」『コミュニケーション学科論集（茨城大学人文学部紀要）』第7号 2000年
- ・「漳州の寺廟について」『関西大学東西学術研究所紀要』第39号 2006年
- ・「文昌帝君信仰と書院—台湾における文昌帝君廟を例に—」『東アジア文化交渉研究』（関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS）第4

号 2011年

- ・「シンガポール・台湾の閩粵系廟と祭神」『関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集』（関西大学東西学術研究所）2011年

第二章の「長崎・沖縄の渡来神と文化交渉」においては、次の論文を元にして再構成している。

- ・「長崎唐寺に祀られる福建系の神々」『アジア文化交流研究』（関西大学アジア文化交流研究センターCSAC）第2号 2007年
- ・「那覇久米村の天尊廟について」『アジア文化交流研究』（関西大学アジア文化交流研究センターCSAC）第3号 2008年

本書が形になるまで、多くの方にご協力をいただき、またご迷惑をおかけすることになった。特にここでは、博士論文審査においてご協力いただいた関西大学大学院東アジア文化研究科の松浦章先生・吾妻重二先生・藤田高夫先生・中谷伸夫先生・内田慶市先生・陶徳民先生に感謝申し上げたい。また関西大学出版部と遊文舎に対しては、普段よりいろいろご迷惑をおかけしているところ、さらに本書の発行でご負担をおかけした。この場を借りてお礼を申し上げることとしたい。

2012年夏 於北摂

二階堂 善弘

【著者紹介】

二階堂 善弘（にかいどう・よしひろ）

略 歴

1962年 東京に生まれる
1985年 東洋大学文学部中国哲学文学科卒業
1997年 早稲田大学大学院文学研究科博士課程退学
1997年 東北大学大学院国際文化研究科助手に赴任
1998年 茨城大学人文学部コミュニケーション学科助教授に転任
2004年 関西大学文学部総合人文学科赴任、現在に至る
博士（文学）東洋大学・博士（文化交渉学）関西大学

主要著書

『封神演義の世界』（大修館書店 1998年）
『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部 2006年）
『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部 2009年）

アジアの民間信仰と文化交渉

2012年 8月31日 発行

著 者 二 階 堂 善 弘

発行所 関 西 大 学 出 版 部
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

印刷所 株式会社 遊 文 舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

©2012 NIKAIDO Yoshihiro

printed in Japan

ISBN 978-4-87354-548-6 C3014 落丁・乱丁はお取替えいたします。